

本研究は、油彩制作において筆や絵具を舐触する（舐めて確かめる）という身体性から、油彩画と人との間に生じるアフォーダンスを探究するものである。道具がもつ誘因性の解釈に身体性を重ねることで、油彩制作がすでに経口的に画家の身体を通じた「描くべきもの」を選び取る行為であると定義づけた。その一例として、油絵具による半透明の塗り重ね（ヴェラトゥーラ）の工程において筆を舐めることで、唾液が絵具にわずかに乳化作用をもたらすという生理的特性に着目した。その特性には乾燥の促進、質感の変化、ヴェラトゥーラの補助的機能がある。

これまで唾液が技法的に油彩の補助剤として明示された例は乏しく、主に 18 世紀以降の修復現場において保護ワニスの洗浄技術として唾液が用いられてきた。これは制作過程における唾液の使用を直接示すものではないが、修復実践は唾液と油絵具との併用に一定の安全性と物質的相互作用の可能性があることを示唆している。

画家が筆を舐めていたという事実は、中毒症状の記録などから確認されるが、なぜ顔料を口に含む必要があったのか、その動機や技法的意味については明示的記述が少ない。この行為は単なる習慣ではなく、意図的に顔料を口に含むことで素材を制御し、特有の描画効果を得るための手段であった可能性がある。特に唾液を含ませた筆で白色や暖色の顔料を用いる工程は、毒性の高い金属顔料の使用と重なる場合が多く、唾液使用がヴェラトゥーラのような効果を生み出していた可能性も含んでいる。

さらに、舐めるという身体的行為そのものが油彩画における意味生成に寄与しており、筆を舐める行為は記述による意識化を介さず、素材の有毒性と直接対峙する姿勢を体現するものであったと考察される。

序章では、筆者の兄との日常経験を起点に、絵画表現における人間の身体性と社会的視線の交錯を考察する。ブリューゲル『盲人が盲人を導く』を参照し、障害者表象とアベリズム（容姿主義）の関係を問い、視覚芸術における人物描写の倫理性と精神性の問題を提起する。さらに、唾液を介した身体な接触や道具との直感的関係が油彩制作の起点として浮かび上がることを示し、制作行為におけるアフォーダンスを展開していく。

第1章では、J.J.ギブソンのアフォーダンス理論を基盤とし、制作道具の形状や素材性が行為を誘発する可能性を検討する。筆を舐め、唾液を介在させる行為は単なる習癖ではなく、身体と素材の応答的關係として捉えられる。舐触は動物のグルーミングに見られる自浄性や情動調整と類似し、舌を通じた接触が身体と世界の境界を揺さぶる知覚経験を形成する。また、障害をもつ兄の生活経験から、アフォーダンスが身体に依存して変容することを指摘し、筆の舐触を身体性に根ざした実践として再定義する。これにより、絵画表現は美の規範やアベリズム的視線を相対化したアンチテーゼを内包することが明らかとなる。

第2章では、筆を舐める行為を生理的直感に基づく合理的操作として再検討する。舌や唇は柔軟で摩擦が少なく、毛先を傷めずに絵具を整える点で道具の特性に即した機能を果たす。歴史的には鉛顔料の使用と関連する画家病（サタニズム）が記録されているが、同時にこの実践が制作の精緻さや速乾性に寄与していた可能性を示す。唾液の粘性や酵素的作用は油彩の粒子分散や定着を助け、画面に透明性と滑らかさを与える効果を持つ。すなわちこの行為は、危険性に還元されない技法的意義を内包し、身体と素材の応答關係の重要性を示している。

第3章では、唾液を油彩制作における水性補助剤として用いた場合の表現効果を検証した。唾液を混合したテールベルト試料は最も速乾性を示し、乳化によってマットな質感と明度変化が生じた。またリンシードとの比較においては、乾燥性に優れる一方、混和性と光沢においてはやや劣る傾向が見られた。唾液は混和性に応じて乾燥挙動と質感を顕著に変化させ、通常使用において定着力も維持された。これらの成果は、唾液を古典的および現代的文脈における補助剤として再評価する意義を示すものである。

結章では、舐触という身体的操作を起点に、油彩制作における絵画と身体を再考した。唾液は速乾性や乳化作用を備え、皮膚の質感や温度感を画面に付与する補助剤として機能する。身体を含んだ描画行為は、素材や対象との応答關係を通じて画面に生命感をもたらし、そのプロセスは作品と鑑賞者との間にアフォーダンスを生む。こうした実践は、作家性の理念を根底から支えるものである。